



医師偏在の是正なくして、 地域医療再生はありえない。

健やかな毎日を送るために、行政にはいまどのような施策が求められているのか。第2回は「医師偏在」の問題を考える。

女優

紺野美沙子さん

岩手県知事

達増拓也さん

紺野 震災から六年が経って、今、医療関係の復興はいかがですか？

達増 東日本大震災津波では、沿岸部に位置する医療提供施設の半数を超える百八十カ所が被災しまして、そのほとんどが全壊、半壊等の大きな被害を受けました。中でも津波被害の大きかった沿岸南部の陸前高田市そして大槌町と山田町にある三つの県立病院が全壊しました。そのうち、大槌病院と山田病院が診療再開しています。そして、今年度中には高田病院も再建の予定です。

紺野 着々と復興は進んでいるんですね。

達増 沿岸部で被災した医療機関のうち、約九割は診療が行えるところまで回復していますが、そこでいま問題になっているのが、医師をはじめとする医療従事者の確保なんです。

負担が行く。医療崩壊です。十年くらい前、岩手県は医療崩壊に直面していたんです。それをなんとか緩和させようと、平成十七年度に「医師確保対策アクションプラン」というのをつくりました。高校生から医学生、そして、臨床研修医を経て、県内に定着するまでの医師のライフステージに対応して、「育てる」「残ってもらう」といった取り組みを進めてきたんです。医師養成奨学金制度も導入をして、毎年度、五十五名の貸し付け枠を設け、医師を養成していました。

紺野 まずは人材育成から。
達増 それと同時に、県民の意識改革も図りました。平成二十年から「県民みんなで支える岩手の地域医療推進運動」というのをスタートさせたんです。例えば、平日は会社があるから、土・日に救急病院に「ちよっと風邪気味なんです」と行く人が

がいる。風邪気味なら、まずはかかりつけのお医者さんに診てもらいましょう。症状に応じて、適切なところで受診しましょう。そこから意識を変えて、みんなが病院勤務医のお医者さんを守りましょうというキャンペーンなんです。テレビコマーションをやったり、ポスターを作ったりしたことで、ある程度病院の救急患者の数が減ったり、本当に入院が必要な人の割合が高くなりました。

紺野 意識改革の効果が表れたんですね。

紺野 お医者さんの数は増えても、格差は縮まらない。

達増 震災直後、全国から応援のお医者さん方が来て、県立病院を中心に手伝ってくださったので、短期的には医師不足があまり程度緩和したところがあります。それでも全国平均との格差

紺野 建物が再建されたとしても、そこで働くお医者さんの確保が難しい、と。

達増 岩手県の人口十万人当たりの勤務医の数、医療施設に勤務するお医者さんの数は、平成二十六年のデータによると、全国四十二位の百九十二人なんです。これは二十年前、平成六年に百五十八人だったときに比べると、十万人当たりの数は三十四人増えているんです。ただし、平成六年時点で岩手県と全国平均の差は約十九人だったのが、平成二十六年現在では全国平均との差が四十二人に拡大しているんです。

紺野 岩手県は広いから、移動だけでも大変ですよ。

達増 負のスパイラルを我慢して無理してやっていると、そういう人たちに負担が集中して、結局続けられなくて辞めてしまう。そうすると残った人に倍の





達増拓也 Takuya Tasso

昭和39年、岩手県盛岡市生まれ。東京大学法学部卒業後、外務省に入省。米国ジョンズ・ホプキンス大学国際研究高等大学院修了。外務省大臣官房総務課課長補佐等を経て、平成8年に衆議院議員(連続4期当選)。平成19年岩手県知事に就任、現在3期目。

達増 ええ。お医者さんも県民に支えられているということ、がんばって地域に残ってくれるようになりまし、奨学金で学んだ若いお医者さんが現場に出るようになってはきたんですが、それでも全国との格差はまだあります。やはりこれは、日本全体で医師の偏在の是正をしてもらわなければならぬと考え、岩手県では「地域医療基本法(仮称)」の制定を提言としてまとめたんです。

地域医療基本法は日本の医療の未来を守る

紺野 自治体だけの取り組みでは、限界がありますからね。

達増 はい。三つの施策が柱になっていて、一つは医師等の計画的な養成で、これはやはり国が中心になって、診療科の偏在も考慮した養成を計画的に行なっていくこと。二つ目が医師の適正な配置ということ、これは国のほうで医療法とか医師法とか、法改正をしてもいい、都道府県側はそういう国の施策に基づいて、二次医療圏ごとの医師の適正配置に取り組む。三つ目が医師の待遇・研修の充実ということで、医師のキャリアデザイン、人生設計、これと地域医療の確保が両立できるようにしていくということです。

紺野 国を挙げて、地域医療

そして日本の医療の未来を守っていかねばいけない。医療崩壊、これは決して岩手県に限ったことではないですからね。全国どこで起こってもおかしくない。

達増 そうです。一人当たりの医師数が少ないのは、実は埼玉県など東京周辺の首都圏でもありませんし、都会でも「たい回りし」で命を落とす人が出たりしています。やはり必要なところに必要なお医者さんがいる「適正配置」というものを、全国レベルで考えていかなきゃならないんだと思います。復興の仕事をしていて思ったのは、復興と、この人は一人でも切り捨てたり、

見捨てたりしてはいけないんだということです。一人一復興。一人ひとりの生活の再建がちゃんとできていくかというのを見ていくのが復興であって、建物をつくったり、道路を直したりすればいいというものではないんです。国全体の行政もそういうものなんだと思います。やはり一人の取りこぼしもないようなものが求められていて、そのためにはやっぱり地域医療をしっかりと支える制度というのが不可欠なんです。

紺野 一日も早く、岩手県の提言が実現される日がくると思います。今日はありがとうございました。

紺野美沙子 Misako Komno

昭和55年、NHK連続テレビ小説「虹を織る」でヒロインを演じる。その後、女優として活躍するかたわら、平成10年には国連開発計画親善大使に任命され、国際協力の分野でも活躍している。平成22年秋から、「紺野美沙子の朗読座」を主宰している。



隣の家の子ども知らない人たちが、いざという時、助け合えるでしょうか。

窯で焼いたピザを頬張り、ワイワイしながら仲良くなる。地元の人が集う場所を提供する『特別養護老人ホームなのりの杜・なのりの里』。

真っ青な空の下、山々に囲まれた場所に、その施設はある。『特別養護老人ホームなのりの杜・なのりの里』だ。ここには、毎週多くの地元の人が集まる。その代表が松の木を使った交流施設だ。ピザ窯やバーベキュー道具を用意し、町内会や子供会の人たちなどが無料で楽しめる。そして、近くの野球グラウンドでは、リトルリーグの子供たちが汗を流す。施設全体が交流場所となっているのだ。さらに、地元の人や入居者も多数参加している自然森林環境学習の開催や、椎茸栽培、間伐、植樹といった自然との交流も行われている。これらは、すべて“なのり山再生プロジェクト”、“なのり生き活きプロジェクト”という事業の一環だ。一人の参加者がこう言った。「ここでは知らない



人はいません。いたとしてもこの場所ですぐ仲良くなれる。だからいざという時も助け合える」。人と交流し、自然と交流し、どちらの大切さも知る。こんな人として当たり前のことを私たちはすぐ忘れる。そのことを教えてくれる場所を作るのも地域貢献だ。SGグループの活動がそう語っていた。

その地の、その人と、ともに。



東北医療福祉事業協同組合 青森県八戸市大字河原木字八太郎山10番地81

内丸病院 / 養宿温泉病院 / 介護老人保健施設ゾリア加賀野 / 介護老人保健施設ほほえみの里 / 介護老人保健施設サンライフをほし

「地域医療基本法(仮称)」に関する詳しい内容は下記ホームページでご覧ください。
<http://chiikiiryu-iwate.jp/>
※スマートフォンからもご覧いただけます。

